

マンボウ夢遊郷

中南米に行く

北杜夫



マンボウ夢遊郷

中南米を行く

北
杜夫

文藝春秋



© Morio Kita. 1978

マンボウ夢遊郷

中南米を行く

780円

昭和五十三年三月二十五日 第一刷

著者 北 杜 夫

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

郵便番号 (102)

東京都千代田区紀尾井町三
電話 (〇三) 二六五一一二二一

印刷所 凸 版 印 刷

製本所 加 藤 製 本

万一、落し乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

マンボウ夢遊郷

《内容目次》

《メキシコ》

太陽、風、そして血の匂い

7

マリアッチが奏でる躁病の歌（グアダハラ）……

9

出来たてのテキーラを試飲する（テキーラ村）……

24

ピラミッドからズリ降りた壮挙（？）（メキシコ・シティ・テオチワカン）……

31

聖なる教会のベンチで昼寝をした（タスコ）……

44

《コロンビア》

雨は冬、晴は夏なる無法の風

55

貧民街の落下傘部隊（ボゴタ）……

57

岩塩に掘られた大伽藍に祈る（シバキラ）……

62

《ブラジル》

果てしなき国土に降る陽光

73

渇水・増水差10メートルのアマゾンに遊ぶ（マナウス）……

75

人種のルツボの中の日本人たち（リオ・デ・ジャネイロ）……

101

日本より日本的な東洋日曜市場（サンパウロ）……

123

世界最大の滝で禁採集の蝶を追う（イグアス）……

131

ヘル

働き、芸術し、信仰する弓場農場へアリアンサ村へ	143
移民船「笠戸丸」入港に思いを馳せるへサントスへ	167
稀薄な空気の中に立つインカ文化	181

宇宙人(？)の顔もある天野博物館へリマへ	183
高山病を怖れずに酒を飲むへクスコへ	195
広大な遺跡の間を蟻の如くへマチュピチュへ	203
砂漠の直射日光に曝される移民の白い墓へカニエテへ	212

余録① ニューヨークで失神へニューヨークへ	224
余録② アマゾンの焼畠へワイクラッパ島へ	231

写真
地凶

藤森秀郎
高野橋康

マンボウ夢遊郷

中南米に行く



メキシコ

太陽、風、そして血の匂い





タコスをはおばるマンボウ氏 (前頁)

マリアッチが奏でる躁病の歌

昭和五十二年三月二日早朝、ロスアンゼルス空港からメキシコのグアダハラ行き飛行機に乗る。

もう、周囲はスペイン語の世界である。スチュワーデスも黒髪に黒いきつい目、藤森(秀郎)カメランの助手として同行したSさんが、
「綺麗なのが多いですね」

と、至極嬉しそうにしている。

そう言われてみれば、子供もごく可愛いのがいる。反面、いかにもこれがメキシコ人だといわんばかりの、精悍な目つきをした髭づらの大男が通路を通る。

私としては、スチュワードスの顔立ちに気をくばるより、眠くてかなわなかった。昨日ロスに着き、その夜は早く睡眠剤を飲んで寝たのだが、午前三時頃目覚めてトイレへ行き、ベッドに戻るとそのままボタンキューと寝てしまった。すると、しきりに寒く、意識がかすかに甦よみがえって来る。気がつくと、逆さまに、つまり枕に足をかけて寝ている。毛布一枚かけていない。早く方向を変えて毛布をかけなければ、と思いつつ、眠くてどうにもならず、ついにそのまま六時十五分にかけて目覚ましが鳴るまで逆さまに寝ていた。従ってむろん睡眠不足である。

それでも飛び立ってすぐ、スペイン語につづいて、「左手にロング・ビーチが見える」とアナウンスがあり、

「あの三角のでっぱりのところ、四本マストの船が見えるでしょう。あれがクイン・メリー号です」

と、Sさんが教えてくれる。その豪華船は玩具よりも小さく見えた。

三十分ほど飛ぶと、カリフォルニア湾上空となった。陸地はわずかに低い山の点在する完全な白い砂漠である。江戸時代、この地方に流れついた漂流民の小説を書いたことのある私は、さすがに目が覚める思いで、その荒涼とした海岸を眺めていた。海はわりに淡いブルーのごく平坦なひろがりであった。

食事にはエコノミーなのにシャンペンも出る。肉にしてもハム、ベーコン、ソーセージなどを好みに応じてとりわけてくれる。

「あんがいサーピスいいじゃないの」

などと話しているうち、もう車輪の出る音がした。ロスから二時間十五分。その代りドスンという着地であった。そのあと滑走路をかなりのスピードでまわり、乱暴な操縦である。

「こちらのパイロットはたいい軍人あがりだから、操縦も荒っぽいですよ」という話を、この旅のあいだあちこちで聞いた。

石川さんという人に迎えられる。税関のトランク検査で、大量に持ってきた蝶採集用の三角紙を役人がいじくりだした。更に甲虫採集用の毒管も。

「インセクト」などと言ってもむろん通じない。

「昆虫採集って何て言うんです？」

と、石川さんに訊くと、

「さあ、それはぼくも……」

と、彼も困惑したような顔をした。

しかし、役人はあんがい簡単に、オーケーというポーズを取った。

だが、私は石川さんが、役人に一枚の紙幣を手渡すのを見ていた。あとで、

「いくらやったんですか？」

と尋ねると、十ドルとのこと。以前は五ドルくらいだったのが、このところ相場があがったという。

三月というと、こちらは乾期で、さすがに暑い。三十二度ほどのことだが、三十八度くらい

になることもあるそうだ。グアダハラはメキシコのふるさとと言われ、農業都市で、大きな工場はほとんどなく、スモッグもない。海拔千四百メートルほどの高地であり、乾期は五月頃までつづき、その間ほとんど雨は降らない。一年じゅう温和な気候で、ただ水はわるい由だ。

空港から十五分くらいでグアダハラ街に入る。

「街路樹の幹をごらんさい。みんな白く塗ってあるでしょう」

と、石川さんが教えてくれる。

「アリよけなんですよ。ああしておかなくと、一晩で葉をみんな食い尽されることもあるんです」
白い葉は石灰とのことであった。実物は見ないが、兵隊アリのようなものがあるらしい。もつともアリの種類はごく多いから確言はできない。ブラジルで私は葉切りアリの活動しているさまを見ることができた。

午食は、石川さんの経営する日本レストラン「スエヒロ」に招^よばれた。見まわすと、外人客ばかりである。

私はソバのような軽いものが食べたかった。ところが、ここにくる外人客には鉄板焼きが主に受けていて、ソバを作るのに三十分かかるという。ニューヨークなどと違い、寿司や刺身はほとんど出ないと聞いた。

私たちは刺身を頼んだ。ビールも三種類、別種のものを頼んだ。強い順に述べると、ボヘミア、ババリア、スーペリオールとなる。「トコ」とスペインで言われる赤身の魚は平アジの類で、あとタイや貝柱など。十分に食べられる。

ここの従業員は現地人のほうがずっと多い。着物を着たスペイン人の女性が、なにやら言い、私のお碗を下げようとするのを、慌ててとどめた。私はお碗はゆっくりするからである。しかし、考えてみればお碗はスーブのようなものであろう。外人はスーブから始めるから、彼女が最初にそれを下げようとしたのもうなずける。食後、石川さんの案内で市中に出かける。

中央寺院の広場でベンチに憩っていると、幼い靴磨きの少年がやってきた。

「磨かせますか？」

「いや、ぼくは……」

実際、ここ十年以上、私は靴を磨かせたことがない。しかし、藤森さんが写真を撮るからというので、頼むことにした。

通訳の石川さんに向って、何か言う。「靴墨をつけるか？」ということらしい。どうせ磨かせるのなら、どんなことをやるかと思つて、すべてうなずく。すると少年——石川さんが年を訊くと六歳と言ったが、四歳くらいにしか見えない小柄な子だ——は二種の靴墨をつけた。布で磨き、またワセリンのようなものを塗り、懸命に布でこする。手は真黒である。その間、ニコリともしない。

台の上にのせた足を変えるときには、命令口調でなにか言う。そのうちに、もう少し大柄のやはり靴磨きの少年が二人やってきた。しきりに私の靴を磨いている少年に話しかける。客を掴まえてうまくやったなあ、とても言っているのだろう。

終つて、石川さんに値を訊いてもらったら、十五ペソだという。一ペソは十五円くらいだ。

「相場はいくらなんです？」

「五ペソです」

「やはり、ふっかけるなあ」

「あまりやらんほうがいいですよ。他の客が迷惑するから」

言われなくても、私はまだメキシコの金を持っていない。それに、私は確かに貧乏そうな子供にも、無闇に金は与えない主義だ。それは一時的に彼らを富まそうが、彼らの心をダメにしてしまうからだ。

私は首をふり、指を五本出す。少年は不満そうに首をふる。結局、石川さんは六ペソを与えた。それでも少年は不満そうにニコリともせず、やっと去って行ったが、折角観光客らしい男を攫^{さら}めたのに……という表情に溢^{あふ}れていた。

広場には、椅子と台をかまえたもっと本格的な大人の靴磨きが何人か、客もこないで無聊^{ぶろうち}そうに雑談していた。彼らは公定料金五ペソの靴磨きだそうだ。

「北さん、綺麗な子がずいぶんいますよ」

と、街をぶらつきながらSさんが言う。

「Sは四日しないと、鼻血ブーだからな」

と、藤森さん。

しかし、本当に綺麗な女性が多い。スペイン本国よりずっと可憐な感じの子が多い。しかも、日本人好みの小柄なタイプである。昔、フランス排斥運動のときメキシコにいたフランス人の大